

社会教育施設の自己紹介

【施設名】世田谷美術館

【施設概要】

世田谷美術館は、1986年、東京の都心から程近い砧公園の一角に誕生した、中規模の近代美術館です。世田谷区はアーティストが数多く住む地域であり、そのことが美術館開館の大きなきっかけにもなりました。収蔵作品数は1万点以上に及び、アンリ・ルソーに代表されるフランスの「素朴派」の画家たちの作品や、北大路魯山人の器・絵画・書のコレクションのほか、著名な在住作家の作品などを収集しています。現在では、物故作家の生家やアトリエを改築した3つの記念館も持っています。

当館では20年前の開館当初より、「日常と美術」をキーワードとして、先進的な教育普及活動を展開してきました。地下に3つの創作室を構え、子どもから大人まで、誰もが日々の生活のなかにアートの“種”を発見できるようにと、五感を駆使するプログラムを数多くつくってきました。演劇やダンス、音楽へと自在に越境するユニークなワークショップを試み続けているのも特徴です。

世田谷美術館ホームページ→ <http://www.setagayaartmuseum.or.jp/>

【特色ある取り組み】

世田谷美術館は地域の学校との連携に特に力を入れ、開館以来、世田谷区立小学校の全4年生と同中学校の全1年生（合計約8,000人）の子どもたちの来館を毎年受け入れています。「鑑賞教室」という事業です。

【美術鑑賞教室：http://www.setagayaartmuseum.or.jp/collaboration/win_class01.html】

1996年からは、希望する小学校に対して事前の出張授業（「鑑賞教室特別プログラム」）を行うようになり、翌97年からは、子どもたちの来館時に館内を案内するボランティア（「鑑賞リーダー」）を導入しました。現在では、「鑑賞教室特別プログラム」は毎年40校を越える小学校（全体の約7割）で実施しており、「鑑賞リーダー」の数は300人近くにのぼります。「鑑賞教室特別プログラム」の授業プランを考え、各校で実施するのは、インターンシップの学生たちです。当館は東京学芸大学の生涯学習研究室と提携し、毎年10人前後の学生に、約8ヶ月にわたって週に1～3回活動してもらいます。学生は美術専攻に限らず、音楽・ダンス・環境教育・国際理解教育など多様な専攻や関心の人に来てもらうのが特徴で、学芸員とともに全員でディスカッションを重ねながら、一つの展覧会に対し十人十色の関連プログラムをつくっていきます。また学校に出向くときは、授業をする学生以外に必ずサポートの学生が入るようにし、チームで授業を支えます。さらには、授業を行う各学校の先生方の助言と協力によって、一つの授業プランでも学校ごとに微妙に異なるプログラムが実現します。このように、視点の多様性を確保した上でのチームワークによって、「鑑賞教室特別プログラム」は独特の豊かさを得ており、学校の先生方にも大変好評です。

なお近々、この10年間で蓄積された100例あまりのプログラムから、いくつかを選んで紹介する冊子を刊行する予定ですので、ぜひ多くの方にご利用いただきたいと思います。

【作品を見るボランティアと子どもたち】→

さて、来館時に子どもたちを案内する「鑑賞リーダー」の多くは、当館の年間講座である「美術大学」を修了した地域の方々です。

【美術大学：http://www.setagayaartmuseum.or.jp/event/win_school01.html】

アートとは何か、アートをどう楽しむかを、実技や講義等を通して学んだこうした方々に対し、いわばさらに学び続ける一つ的手段として、当館はボランティア活動を提案しています。

(美術館ボランティア：<http://www.setagayaartmuseum.or.jp/volunteer/index.html>)

当館が「鑑賞リーダー」に望むのは、作品を見つめる子どもたちの声に耳を傾け、わからないことはいっしょに考え、ともに新しい発見をする、ということであって、自分が覚えたことを子どもたちに注入する、という活動ではありません。慣れないうちはしばしばそうなりがちですが、数年にわたり活動を続けていくうちに、多くの方が自然体で、つまりそれぞれのスタイルで、ゆったり楽しみつつ子どもたちや作品に向き合っていくようになります。そうすると、不思議なことに、どんなに大勢の子どもが展覧会場内においても、何とも言えない穏やかさが漂うようになるのです。最近では引率の先生方もすっかり安心して、ご自身も展覧会を楽しまれるようになってきました。

インターンの学生による「鑑賞教室特別プログラム」と、ボランティアによる館内案内によって、当館は地域の学校との密接な関係、つまり先生方の信頼や子どもたちとの豊かなコミュニケーションという財産を得ただけではありません。美術館を舞台にインターンやボランティアといった様々な人々が活躍すること自体が、館を活気づけるかけがえのない宝になっています。とはいえ、「様々」の幅はまだまだ狭いかもしれません。例えば地域に住む外国の方、障害を持つ方・・・もっと多様で多彩な人々が活動できる場になるにはどうしたらいいのか。今後も当館の模索は続きそうです。

【出張授業の様子】→

